

福島・相双で看護師確保難航

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故の影響で福島・相双地域の看護師不足が依然として深刻だ。

相双地域の看護師数は、震災前の約6割。県は今年度、看護師確保の対策に本格的に取り組み始めたが、難航している。

相双地域での生活環境が整っていることをアピールすれば、こうした不安を払拭することにつながると考え、県は5月、インターネットサイト「ふくしま看護職ナビ」を開設。県内医療機関の求人情報など約130件を掲載しているだけでなく、地域の子育て支援施設や住宅情報などの問い合わせに応じるのが特徴だ。ただ、開設から1週間の閲覧数は約50件と低調。担当者は「まだまだ知名度不足。今後、周知・広報を徹底したい」とする。

(5月21日付読売新聞)

関西中心に風疹流行 妊娠女性、成人男性注意

風疹が関西地方を中心に流行しており、全国の患者数も2008年以降で最多のペースで増えていることが、国立感染症研究所の集計でわかった。厚生労働省は、全

道府県に対して8年ぶりに注意喚起の通知を出した。

感染研の集計では、5月20日までの全国の今年の累計患者数は205人。全数集計の始まった2008年以降でこの時期最多だった2008年の169人を上回った。前年同期比では約1.6倍。

風疹は子どもの病気との印象があるが、近年の患者の大半は成人男性。今年の205人の患者でも、男性は153人で約75%。このうち30歳代は57人、40歳代は28人と半数を超え、全患者中の41%を占めた。

風疹は妊娠初期の女性がかかると胎児に感染し、赤ちゃんの心臓や目、耳に障害を残すことがある。大人の男性も、家族や職場など身近に妊娠を望む女性がいる場合、医療機関に相談してワクチンを接種することが望ましい。

(5月31日付共同通信)

男性70.42歳、女性73.62歳 「健康寿命」を初算出

厚生労働省は、来年度から10年かけて行なう健康づくり計画「第2次健康日本21」を話し合う部会で、介護を受けずに日常生活を支障なく暮らせる期間を表す「健康寿命」について、2010年で男性が70.42歳(同年の平均寿命79.64歳)、女性が73.62歳(同86.39歳)だったとする算出結果

を初めて明らかにした。

6月内に決定する予定の第2次計画では、22年度に平均寿命の増加分を健康寿命の増加分が上回ることを目指す。

(6月1日付時事通信)

難病の子と家族を癒やす 「こどもホスピス」

がんや先天異常などの難病の子たちに、治療を受けつつ学びや遊びを楽しんでもらう日本初の「こどもホスピス病院」を、大阪市東淀川区の淀川キリスト教病院(棕棒正昌総長、657床)が今秋、開設する。

ホスピスは、がんなどの末期患者が穏やかな終末を迎える場だが、同病院が手本とする欧米の施設は、子どもと家族が休み、楽しむ場。難病の子だけでなく、介護する親たちにも手を差し伸べたいという。

開設するこどもホスピスは12床。4人部屋に相当する約30平方メートルを個室にし、家族やペットも一緒に宿泊できる。授業を受ける「がっこう」や、遊具などがある「おそと」を設け、保育士や遊びの専門家の配置を検討している。

長期入院も可能だが、自宅で暮らす難病の子が数日間訪れる利用を主にする。介護する家族の重い負担を軽減できる。費用は、通常

の治療費や入院費のみ。

(6月4日付読売新聞)

代理出産：容認を検討

卵子提供や代理出産など第三者がかかわる生殖補助医療について、自民党の議員有志がこれらを条件付きで容認する内容の法案の素案をまとめた。これを受けて日本産科婦人科学会(以下、日産婦)は、学会内に作業班を設置して素案の内容を検討することを明らかにした。夏までに見解をまとめる。

生殖補助医療には公的な規制がなく、日産婦は指針で、提供者の負担が大きい卵子提供や、親子関係が複雑になる代理出産を認めていない。しかし実際には提供卵子を使って体外受精を受け出産することや、夫婦の受精卵を第三者が妊娠、出産する代理出産が国内外で行なわれている。

(6月10日付毎日新聞)

准看護師：養成廃止へ …神奈川

神奈川県の黒岩祐治知事は6月12日、准看護師の養成を廃止する方針を示した。県立専門学校で准看護師志望者の募集を停止するほか、医師会などが開設する県内

の専門学校に出している補助金も打ち切る方向で検討する。准看護師をめぐるのは、教育内容が医療の専門化に対応できていないとして、国の検討会が1996年に廃止方針を打ち出したが、医師会の反対で進んでいない。県は併せて看護師不足対応の代替策も検討していく。

(6月13日付毎日新聞)

悲しみの中の決断 …脳死男児の家族

富山大学附属病院(富山市)で6歳未満として初めて脳死と判定された男児からの肝臓、腎臓の移植手術が6月16日未明、国立成育医療研究センター(東京都世田谷区)と富山県立中央病院(富山市)でそれぞれ終了した。

同センターでは10歳未満の肝不全の女兒に肝臓が移植され、同日午前3時に手術が終わった。女兒の容体は安定しているという。順調に回復すれば2〜3か月後には退院できる見込み。

松井陽病院長は記者会見し、「(男児の家族に対し)深い悲しみの中での決断に謝意と敬意を表したい。今回の提供が契機になり、臓器提供による子どもの移植手術が増えてくれることを望む」と語った。(6月16日付読売新聞)

悩む妊婦支援 法人設立

望まない妊娠に悩む女性のための相談窓口を設け、出産支援や特別養子縁組をあっせんする一般社団法人「命をつなぐゆりかご」(大羽賀秀夫代表)が、熊本市の慈恵病院で設立総会を開いた。

慈恵病院は、養育できない子どもを親が匿名で託せる「こうのとりのゆりかご」(赤ちゃんポスト)を運用。大羽賀代表は埼玉県川口市の一級建築士で、同病院の蓮田太二理事長と交流があり、法人の設立を全国に呼びかけた。

大羽賀代表はこれまで、特別養子縁組を個人としてあっせんするほか、慈恵病院に緊急の相談を寄せた関東や東海地方の妊婦を近くの病院に連れて行くなどしてきた。慈恵病院には年間約700件の電話相談があり、こうした遠方からの相談も多いことから、悩む妊婦を支援する全国的なネットワークが必要と感じたという。大羽賀代表の建築事務所で電話相談を受け付け、内容に応じてメンバーの支援を求める。

(6月18日付読売新聞)